

岡山における連母音の融合状況 (2)

—「岡山市民調査」から見る—

尾崎喜光

1. はじめに

「連母音」とは、子音を挟まずに母音が連続するものである。古代の日本語にはこのような音は無かった。しかしその後、用言の活用形において語中の子音が脱落する「音便」という発音上の変化が生じたこと、また中国から漢語を取り入れる際に原音に近い音すなわち漢字の音読みで取り入れたことにより日本語に連母音が生じた。現代日本語に続く代表的な連母音には [ai] [oi] [ui] などがある。しかし地域によっては、これらの連母音をさらに変化させ、[ai] や [oi] を [e:] などに、[ui] を [i:] などに発音する現象が見られる。たとえば「大根」をデーコン、「寒い」をサミーと発音するのである。こうした現象は「連母音の融合」と呼ばれる。上野善道編 (1989) 所収の言語地図によれば、近畿地方やその周辺の四国地方・北陸地方では融合させずに連母音のまま発音する地域が比較的広く分布しているのに対し、それら以外の地域では融合させる地域が広く分布している。岡山県は、北東部 (美作) は近畿地方からの連続として融合させない地域が多いが、それ以外 (備前・備中) は融合させる地域が多い。

尾崎喜光 (2013) 以下「前稿」と称する一では、岡山県における連母音の融合状況について、筆者が本学で担当する「日本語学基礎演習」において学生たちとアンケートにより収集したデータを分析した結果を報告した。調査は2010年11月から12月にかけて行い、高校生以下の若年層を中心とする575人から回答を得た。分析の結果、形容詞や形容詞型助動詞の連母音 (ただし厳密に言えばいずれも活用語尾における連母音) は融合者率が現在でも非常に高いのに対し、名詞や動詞の融合者率は現在ではきわめて低いというように品詞による違いが大きいこと、また全体として融合者率が高い形容詞でも語による違いも小さくないことなどが明らかになった。

しかしながら、分析対象とした回答者の母集団が岡山県のどの範囲の地域であるのかが十分明らかではなかったこと、また回答者の選び方も無作為というわけではなかったことから、品詞による融合者率の序列はおそらく実態を反映しているであろうものの、融合者率そのものは実態を正確に反映している保証はないという限界があった。そこで今後の課題として、調査対象とする母集団をきちんと定めた上で、抽出の代表性を確保すべく回答者を無作為に多人数抽出して調査し、数値的な精度を高めてゆく必要があることを述べた。

その後、この問題を克服する調査を企画する機会を得た。調査対象とした地域は岡山市である。すなわち、無作為に選ばれた岡山市民を多人数調査する機会を得た。調査ではさまざまな言語事象について質問したが、連母音の融合形の使用について問う設問もいくつか用意した。そこで本稿では、前稿の“続編”として、それを分析した

結果を報告する。

2. 調査概要および回答者の代表性の検討

本調査では、対象とする母集団を明確化し、岡山市在住者（岡山市民）とした。ただし年齢層については、調査協力の得やすさや回答の質を考慮し、調査当時 20 歳～79 歳である者という限定を加えた。性別は男女両方とした。

調査票および回答者に提示する回答票（選択肢が書かれたカード）は筆者が作成したが、調査の実査と集計は、競争入札により（社）新情報センターに委託した。実査は調査票を用いての個別面接法によった。

同社では通常 1 地点あたり 10 数名の回答者を抽出して調査を行なっているが、研究経費の制約から今回は 80 名程度の規模の調査を予定したことから、1 地点あたりの抽出人数を通常よりもやや少ない 10 名前後とし、調査地点数を 8 地点確保した。

調査（実査）は 2013 年 10 月 24 日から 11 月 4 日にかけて行った。調査期間は約 2 週間である。

調査を開始した 2013 年 10 月の岡山市の人口は約 70.4 万人であるが、区ごとの構成比は北区 41.4%、中区 20.5%、東区 13.9%、南区 24.2% である。今回の調査では、調査時の年齢が 20 歳～79 歳という幅を設けているため正確な数値とはならないが、8 地点をこの人口比に従い按分したのが、次の調査地点数一覧の右側の括弧内である。

北区：3 地点（3.3 地点）

中区：2 地点（1.6 地点）

東区：1 地点（1.1 地点）

南区：2 地点（1.9 地点）

小数点第 1 位を四捨五入して自然数にすると、その左側の実際の調査地点数となる。このことから、各区に割り当てた地点数はおおむね人口比に従って按分されていることが確認される。なお、各区内の具体的な調査地点は無作為に選んだ。

本調査の回答者数は 81 人であった。その内訳を区別に示すと次のとおりである。

北区：30 人（33.5 人）

中区：20 人（16.6 人）

東区：11 人（11.3 人）

南区：20 人（19.6 人）

右側の括弧内は、81 人を各区の人口比に按分した数値である。括弧内の数値と実際の回答者数を比べると、東区と南区は両者の数値がかなり近いが、北区は実際よりもやや少なく、逆に中区は実際よりもやや多くなっている。これは、先に見た地点数が自然数でなければならないという制約に起因する問題である。こうした実際との違いはあるものの、しかしいずれも極端な違いというほどではないことから、回答者数についてもおおむね各区の人口比に従って按分されていると言える。

回答者 81 人の性別内訳について、その母集団である 20 代～70 代の岡山市民（約 51.1 万人；2012 年）のそれと対比しつつ示したのが図 1 である。

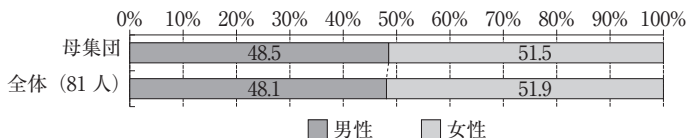


図 1 回答者と母集団の男女比

これによると、回答者の男女比については、母集団とほぼ同じ比率で構成されることが確認される。

同様に、回答者の年齢層別内訳を示すと図 2 のとおりである。

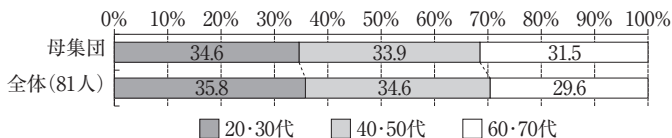


図 2 回答者と母集団の年齢層比

母集団と比較すると、実際の回答者の方は 20・30 代および 40・50 代で数値が多少高くなっている一方、60・70 代で逆に多少低くなっている。母集団と比べ若い年齢層の回答が若干強く反映されるデータとなっているが、しかしこれも極端に大きな違いではなく、おおむね母集団と同じ比率で構成されていることが確認される。

回答者には自身の出身地についても、市町村レベルまでの回答を求めた。設問の中には岡山の方言形式の使用を問うものもあるが、その回答は、回答者の出身地がどこであるかにより異なることが予想されるためこのことを問うた。

回答を、岡山県かそれ以外かという分類で示すと図 3 のとおりである。母集団についてはこの種の情報はおそらくないと思われるため、回答者の情報のみを示す。

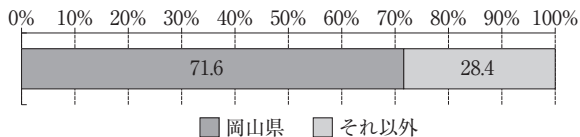


図 3 回答者の出身地

これによると、岡山県出身者は約 7 割であることが確認される。本調査は岡山市民を対象としているが、回答者には県内他市町村出身者や県外出身者も当然いる。いわゆる方言調査であれば当該地域のネイティブのみを調査対象とするが、社会言語学においては当該地域全体としての言語状況を把握することを目標とすることから、母集団にノンネイティブが含まれているならば、回答者にも同じ比率でノンネイティブが含まれていることをむしろ望ましいものとする。なお、本稿で分析対象とする連母

音の融合現象については、岡山県内にも地域差があること（美作地方では融合が少ない）、また県外でも融合が多い地域もあればそうでない地域もあり一様でないことから、以下では出身地別による分析までは行わず、回答者の地理的背景に関する情報として提示するのみにとどめる。

さらに、回答者が15歳までで最も長く住んだ場所についても同様に回答を求めた。言語習得が始まってから15歳くらいまでの期間を「言語形成期」というが、その間どこに住んだかによっても言語使用が異なることが予想されることから質問した。複数の地域で暮らしたという回答者もいようが、全てを回答してもらうのは時間がかかること、また分析の際もそこまで考慮して行うとなると事例的研究にならざるをえなくなることから、本調査では最も長く住んだところ（最長居住地）のみを回答してもらった。結果は図4のとおりである。

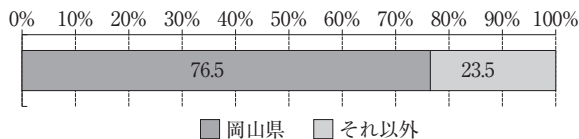


図4 回答者の15歳までの最長居住地

先ほど見た出身地と同様、最長居住地についても岡山県と回答した人が多く、8割近くいることが確認される。

すなわち、出身地についても最長居住地についても、岡山県を地理的背景とする回答者を7～8割含むのが本データであると言える。おそらく母集団も、おおよそそのような比率であると推測される。

以上をまとめると、母集団と多少の違いはあるものの、81人の回答者はおおむね母集団の縮図となるよう無作為に選ばれているものと判断される。すなわち、以下の分析で示す数値は、単に今回の回答者81人だけの数値ではなく、現在の岡山市民（ただし20代～70代）の言語状況をおおむね正確に反映した数値であると言える。

この回答者81人に対する実査（個別面接調査）は、委託した調査会社に所属する5名の調査員が行った。調査員5名の性別内訳は男性1名、女性4名、また年齢層別内訳は50代1名、60代3名、70代1名である。60代の女性が調査員の中心である。

3. 結果と考察

3.1. 各調査語の連母音の融合者率

今回の調査では、連母音の融合以外についても調査することとしたため、連母音の融合に関する調査項目数は一桁台にとどめた。調査では、前稿で明らかにした品詞による融合者率の違いを確認することに重点を置いたため、限られた項目数でさまざまな品詞を調査することを優先した。融合が生じうる主要な連母音には [ai] [oi] [ui] があるが、上記の目的を実現するためには、連母音の種類は一定にせざるを得ない。そこで本調査では、連母音の種類を基本的に [ai] に限定し、以下に示した語（ない

しは語句)を調査した。なお、前稿によると、現在でも融合形が盛んに行われている形容詞(ただし活用語尾)においては、語により融合者率に相当な違いも認められた。そこで、形容詞については調査語を特別に2語とし、融合者率が低かった語の代表として「アケー(赤い)」を、それが高かった語の代表として「ナゲー(長い)」を調査した。なお、動詞については、[ai]を含む語が少ないことから、[ai]に近い[ae]を含む「帰る」を調査語とした。また、名詞+助詞については、助詞の部分は[i]に近い[e]〔「へ」〕とし、これに前接する名詞の部分は、岡山の音声的特徴として指摘されることの多い「コケー」(ここへ)の名詞部分の元の形である「ここ」とした。従って「ここへ」の連母音は[oe]となり、これのみ連母音の前半は[a]ではなく[o]となる。

デーコン(大根)……………名詞
ケール(帰る)……………動詞
コケー(ここへ)……………名詞+助詞「へ」
イッペー(いっぱい)……………副詞
行キテー(行きたい)……………助動詞(形容詞型)
アケー(赤い)……………形容詞
ナゲー(長い)……………形容詞

音声に関するデータは、調査者が回答者の音声を聴いて得ることを本来とするが、具体的な語について融合形を使うことがあるか否かについての内省であれば回答者が適切にできるものと判断し、回答者の内省報告により回答を得た。これは、回答者の内省により自記式アンケートで回答を得た前稿の調査と基本的に同じ方法である。

具体的な質問文と選択肢について、「大根」の場合を例に示すと次のとおりである。

野菜の「大根」のことを、自分でこのように言うことはありますか？ (ア) 言うことがある (イ) 言わない
--

回答者には、大きな字で「でーこん」と書かれたすぐ下に「(ア) 言うことがある」「(イ) 言わない」という選択肢が書かれたカード(回答票)を渡し、該当する方を選ばせた。質問文の「このように」とは、カードに書かれている「でーこん」のことである。調査では、調査員が「でーこん」と発音して質問する方法もありうるが、調査員により発音が不揃いになりうること、また融合しない発音でうっかり提示してしまう危険性もあることを考慮し、文字により音声を提示した。「行きてー」の「行」以外は全てひらがな表記とし、長音の部分は「ー」を用いた。

調査結果は図5のとおりである。グラフの数値は「言うことがある」と回答した人の比率、すなわち融合者率である。回答は二者択一であるため、これらの補数は「言わない」と回答した人の比率、すなわち非融合者率である。ただし、「コケー(ここへ)」のみ無回答が1.2%(1人)あったため、非融合者率は70.4%となる。参考として、岡

山県在住者を対象に調査した前稿の数値を【 】内に示した。名詞+助詞は調査しなかったため数値が示されていない。

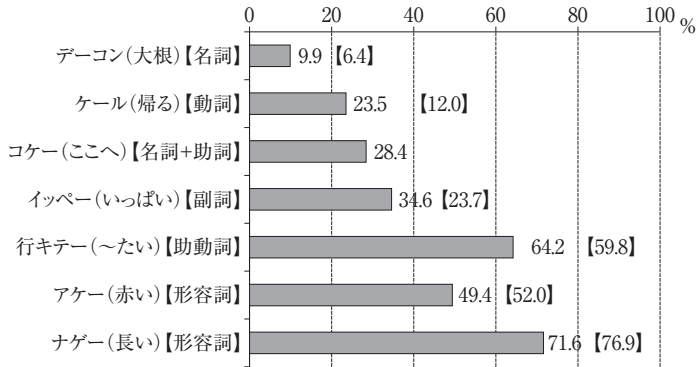


図5 各表現の融合者率（回答者全体）

これによると、岡山市民を対象とした今回の調査でも、前稿で見られた結果と同様に、融合者率は品詞によりずいぶん異なることが確認される。品詞による数値の序列は前稿とほぼ同様である。以下、品詞ごとに見て行こう。

名詞の「デーコン（大根）」の融合者率は、前稿では6.4%と非常に低かったが、今回の調査でも調査語の中で最も低く9.9%にとどまった。現在の岡山市における融合者率は非常に低いことが確認される。

これに対し形容詞は融合者率が高く、「アケー（赤い）」49.4%、「ナゲー（長い）」71.6%である。前稿では、「アケー（赤い）」52.0%、「ナゲー（長い）」76.9%であったが、「アケー（赤い）」よりも「ナゲー（長い）」の方が融合者率が高くなる傾向は今回も確認された。連母音はいずれも [ai] であり、ともに物の状態を表わし、長さも同じ3拍の形容詞であるにもかかわらずこうした違いが生じる原因については、現在のところ明確な理由は分からない。ただ、岡山県において安定した傾向であるとは言えそうである。この傾向は、連母音の融合が見られる日本のさまざまな地域においても共通して見られる可能性もあり、全国規模での地域間比較が今後望まれる。

助動詞の「行キテー（行きたい）」の「テー」も数値が高く64.2%である。活用形が形容詞型であることから、形容詞と同程度の数値になっているのであろう。前稿では「～シテー（～したい）」という抽象的な形で調査したが、融合者率は59.8%と高かった。今回の調査でも同様の傾向が確認された。

動詞「ケール（帰る）」は、前稿では融合者率が12.0%であり、動詞全体としては名詞と同程度に低かった。今回の調査では23.5%であり、名詞の「デーコン（大根）」と比べると数値は相対的に高くなっている。ただし、形容詞や形容詞型助動詞との数値の開きは大きく、それらと比較すると融合者率は明らかに低い。

副詞については、前稿によると、全般的には名詞と同様に数値が低い中で、状態を

表わしかつ語末が [ai] であることから形容詞のように意識して使われることがあると推測される「イッペー (いっぱい)」は 23.7% と相対的に数値が高かった。本調査でも「イッペー (いっぱい)」は 34.6% であり、融合者率は一定の割合はある。名詞等と形容詞等との中間として位置づけられる。

名詞の末尾と直後の助詞「へ」(実際の発音は「え」) が融合する「コケー (ここへ)」の融合者率は 28.4% であった。融合して発音する人は現在では少数派であるものの、名詞と比べると一定の割合いる。これも、名詞等と形容詞等の中間と位置づけられる。

今回の調査では、各品詞からの調査語を基本的に一語のみとしたことから、前稿の結果をも参照しつつ品詞間の序列関係を整理すると、現在の岡山市においてはおよそ次のようであると言える。なお、形容詞(および形容詞型助動詞)といってもここでは活用語尾に注目している点、また副詞といってもここでは意味や語形が形容詞に近い語を取り上げている点には留意する必要がある。

名詞 ≤ 動詞 < 「名詞+助詞」 ≤ 副詞 < 形容詞型助動詞 ≤ 形容詞

3.2. 融合者率の男女比較

以上では回答者全体としての傾向を検討したが、次に回答者を男女に分けて分析するとどのような傾向が見られるかを検討しよう。分析結果は図 6 のとおりであった。

これによると、全ての調査語において、融合者率は女性よりも男性の方で高いことが確認される。融合形を用いる人の割合は、全般的に女性よりも男性の方が多い。岡山市において融合形は、多少男性的なニュアンスを含む語形であると言える。首都圏在住の大学生 399 人を対象に 2005 年にアンケート調査した聶星超(ジョウセイチョウ; 2006) でも同様の男女差が見られたことから、連母音の融合が行われている地域において現在共通する特徴であるのかもしれない。

注目されるのは男女差の度合である。女性の数値を基準にしたとき、男性の数値がその何倍であるかをグラフ中に【 】で示した。

これによると、融合者率が全体的に高い 4 語はその数値が低く 1.1 ~ 1.6 倍であり男女差はそれほど顕著でないのに対し、それが低い 3 語は数値が 2.0 ~ 4.1 倍と大きく男女差が顕著である。すなわち、どの語においても融合者率は男性の方が女性よりも高いが、全体として融合者率が低い語 (= 名詞、動詞、「名詞+助詞」) は、それが高い語 (= 形容詞、形容詞型助動詞、副詞) よりも男女差の度合が大きいという傾向が認められるのである。現在融合形を用いる人が少ない語で融合形を用いるのは主として男性である、ということになる。

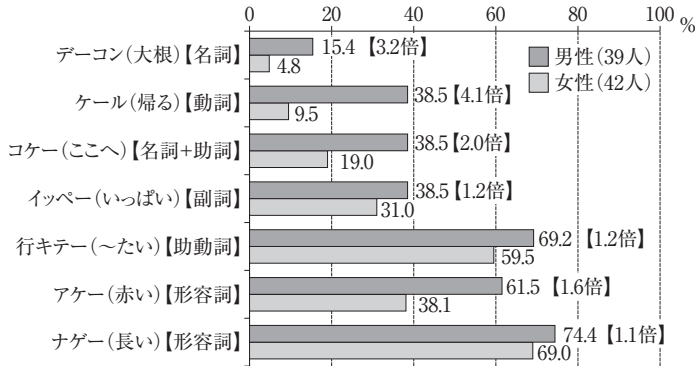


図6 各表現の融合者率（男女別）

3.3. 融合者率の年齢層比較

次に、回答者を年齢層に分けて分析した結果を検討してみよう。分析結果は図7のとおりであった。なお、年齢層は10歳刻みでなされることが多いが、今回の調査では回答者が81人にとどまることからここでは20歳刻みとし、「20・30代」（29人）、「40・50代」（28人）、「60・70代」（24人）の3層とした。

これによると、形容詞と形容詞型助動詞では、若年層ほど融合者率が高くなる傾向がほぼ一貫して認められる。これらの品詞においては連母音の融合が現在一層普及しつつあることが、年齢差として現われている可能性が考えられる。

これに対し、融合者率が全体として低いそれ以外の語は、顕著で一貫した年齢差は認めがたい。融合者率はそれぞれの語においてどの年齢層もおおよそ同程度といってよい状況である。岡山の伝統的な言語状況を一般向けに解説した青山融（1998）によれば、形容詞等と同様に名詞や動詞も連母音が融合して発音されることが記述されている。それを考えると、おそらくかつてはこれらの品詞においても融合形を用いる人の割合は相当高かったものと思われる。それが現在では大きく衰退しているであろう。そのような衰退が生じつつある場合、高年層では融合者率が比較的高く保たれる一方で、若年層では融合者率が低くなり、一貫した年齢差を伴うのが通常である。そのような年齢差が明確には認められない点は少々不思議である。高年齢層でもじつは衰退があり年齢を問わず一様に衰退した可能性や、若年層で先行して衰退した後（つまり少し前には年齢差が認められた）高年齢層でも衰退が生じて数値が若年層に近づいた可能性などが考えられる。

以上をまとめると、形容詞や形容詞型助動詞では融合形がおそらく一層普及しつつあるため若年層になるほど数値が高くなる一方で、名詞や動詞等では融合形の衰退が年齢を問わず現在かなり進行した結果明確な年齢差が認められないまでに至っている可能性が考えられる。

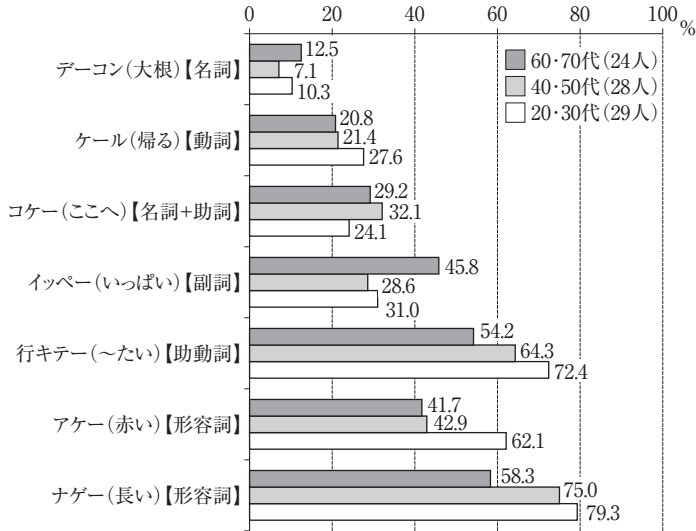


図7 各表現の融合者率（年齢層別）

3.4. 融合者率に関する項目間の関係

以上では調査項目を一つずつ分けて分析・比較したが、次に項目と項目とを関連付けて分析してみよう。つまり、「大根」をデーコンと発音すると回答した人は、「帰る」もケールと発音すると全員回答したというような何らかの規則性が認められるのか、それとも「帰る」についてはケールと発音すると回答した人も多数いればそう回答しなかった人も多数いるというように規則性などは特に認められないのかという点について検討する。調査語は7語であるので組み合わせは21通りあるが、ここでは、融合者率が低い「大根」（名詞）と「帰る」（動詞）の関係と、逆にそれが高いが語による違いが明確に見られた「赤い」（形容詞）と「長い」（形容詞）の関係の2組の組み合わせに注目して分析した。

(1) 「大根」（名詞）と「帰る」（動詞）の関係

分析結果は図8のとおりである。

まず、融合形で一貫している人（デーコン／ケール）、連母音で一貫している人（ダイコン／カエル）、一貫していない人（デーコン／カエル、ダイコン／ケール）の比率に注目して結果を見てみよう。

グラフによると、連母音で一貫している人の割合は約7割と非常に多いこと、それに対し融合形で一貫している人の割合は1割にも満たず非常に少ないことが分かる。名詞にしても動詞にしても現在融合形を使う人の比率は少ないが、両方とも融合形を使う人となると、現在ではかなり少数派となっている。残りの約2割は一貫していな

い人である。一貫していない人の割合は相対的に少ない。

これを男女別に見ると、女性は連母音で一貫している人の割合が約9割と非常に多い点が注目される。男性もその割合が最も多いものの、いずれかを融合形とする一貫していない人も4割と少なくない。この点が男女で大きく異なる。

さらに年齢層別に見てみよう。20歳刻みで集計することで年齢層を3層にとどめたものの、各年齢層への所属人数は少なめになるため数値の安定性が下がる点には注意が必要である。グラフによると、一貫した顕著な年齢差は認めにくいですが、20・30代になると融合形ないしは連母音で一貫した人の割合が減少し、主としてダイコン／ケールというパターンで一貫しない人の割合が増加しているように見られる点は注目される。今回の調査では対象に含まれていないが、さらに下の年齢層でどのようなになっているかが興味深い。

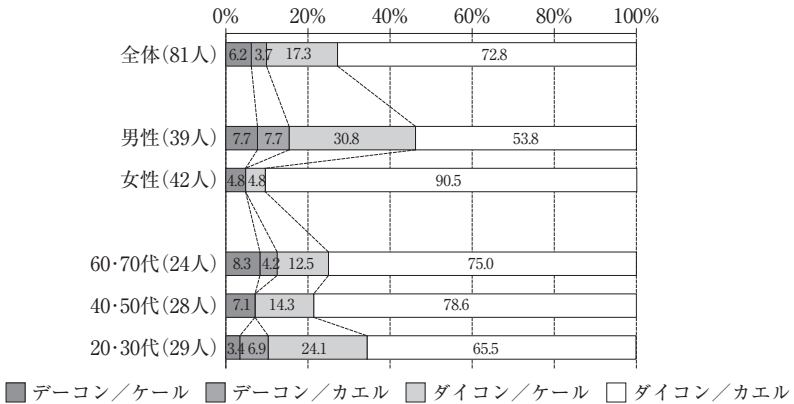


図8 「大根」と「帰る」の融合者率の関係

次に、「大根」をデーコンと発音した人（左側の2つの凡例；なお、厳密には「発音すると回答した人」だが、以下では「発音した人」とする）が、「帰る」をケールと発音したか、それともカエルと発音したかという観点からグラフを見てみよう。まず全体的な傾向を見ると、いずれかへの顕著な偏りは特に認められない。これを男女別に分析した場合も、数値自体は男女で異なるものの、各性別内においてはいずれも偏りは認められない。年齢層別に見た場合も、各年齢層への所属人数が少なくなり数値の安定性が下がるという事情もあり、明確かつ一貫した傾向は認めがたい。以上をまとめると、「大根」をデーコンと発音した人は、「帰る」はケールもあればカエルもあり、名詞を融合形で発音することが動詞の語形を規定するというようなことは特にないと言える。

一方、「帰る」をケールと発音した人（左から1つめと3つめの凡例）が、「大根」をデーコンと発音したか、それともダイコンと発音したかを見てみよう。全体的な傾向を見ると、デーコン／ケールよりもダイコン／ケールへの偏りが認められる。男女

別に見ると、女性はいずれも連母音とする割合が非常に高いという事情もあり、ダイコン／ケールへの偏りは男性において顕著である。年齢層別に見ると、若年層になるほどダイコン／ケールへの偏りが増加する。以上をまとめると、「帰る」をケールと発音した人も、「大根」はデーコンよりもダイコンと発音した人の割合の方が高いこと、すなわち動詞を融合形で発音しても名詞は連母音で発音する人の割合の方が高いことが分かる。

逆の方向からさらに分析してみよう。「大根」をダイコンと発音した人（右側の2つの凡例）が、「帰る」をケールと発音したか、それともカエルと発音したかという観点からグラフを見てみる。まずは全体的な傾向を見ると、ダイコン／ケールよりもダイコン／カエルへの偏りが認められる。男女別に見ると、ダイコン／カエルへの偏りは女性において非常に顕著である。年齢層別に見ると、いずれの年齢層でもダイコン／カエルへの偏りが見られるが、20・30代の若年層になるとその度合がやや弱まる。以上をまとめると、「大根」をダイコンと発音した人は、「帰る」もカエルと発音する傾向が女性を中心に顕著であり、名詞を連母音で発音することは動詞も連母音で発音することを規定するという傾向が認められる。

最後に、「帰る」をカエルと発音した人（左から2つめと一番右側の凡例）が、「大根」をデーコンと発音したか、それともダイコンと発音したかを見てみよう。全体的な傾向を見ると、デーコン／カエルよりもダイコン／カエルへの偏りが著しく認められる。男女別に見ると、特に女性はいずれも連母音とするダイコン／カエルしか見られず、ダイコン／カエルへの偏りは女性において顕著である。年齢層別に見ると、一貫して顕著な違いは特に認められない。以上をまとめると、「帰る」をカエルと発音した人は、「大根」の方はデーコンよりもダイコンと発音する人の割合の方が非常に高いこと、すなわち動詞を連母音で発音することは名詞も連母音で発音することを著しく規定するという傾向が認められる。特に女性においては、この調査で見える限り、そのことを完全に規定しており、いわゆる「含意尺度」(implicational scaling) となっている。動詞を連母音で発音することは、名詞も連母音で発音することを著しく含意しているのである。つまり、動詞を連母音で発音するのであれば、名詞もほぼ当然連母音で発音する、ということになる。

名詞と動詞の関係について要点をまとめると次のようになる。

名詞を融合形（デーコン）で発音する人は、動詞は融合形（ケール）もあれば連母音（カエル）もあり、特にいずれかに規定するというようなことはない。しかし、名詞を連母音（ダイコン）で発音する人は、動詞も連母音（カエル）で発音するという傾向が認められる。

一方、動詞を融合形（ケール）で発音する人も、名詞の方は連母音（ダイコン）で発音する人の割合の方が高い。さらに、動詞を連母音（カエル）で発音する人のうち非常に多くの方は、名詞も連母音（ダイコン）で発音する。

すなわち、名詞および動詞において全体として優勢である連母音は、両者を組み合わせると、個人レベルにおいても優勢であることが確認されるのだが、連母音がより優勢である名詞を連母音で発音することの方が、動詞を連母音で発音す

ることよりも、個人レベルにおいて連母音を使うことのより強い基盤・前提となっている、と言える。

(2) 「赤い」(形容詞)と「長い」(形容詞)の関係

分析結果は図9のとおりである。

まず、融合形で一貫している人(アケー/ナゲー)、連母音で一貫している人(アカイ/ナガイ)、一貫していない人(アケー/ナガイ、アカイ/ナゲー)の比率に注目して結果を見てみると、融合形で一貫している人が約5割と最も多いことが分かる。この残りを、連母音一貫している人と、一貫していない人がほぼ同じ割合で分け合う形となっている。注目されるのは、一貫しない組み合わせにおける関係である。アケー/ナガイがわずかに2.5%にとどまるのに対し、アカイ/ナゲーはその10倍の24.7%を占め、後者への大きな偏りが見られる。つまり、融合形の使用について一貫性がないといっても、融合形と連母音のいずれが使われるかはフィフティーフィフティーという形で一貫性がないのではなく、「赤い」はアカイであるのに対し「長い」はナゲーという形で、すなわちこの両語についてはアカイ/ナゲーという組み合わせとしてかなり予測可能な形で一貫性がないのである。

これを男女別に見ると、男性は融合形で一貫している割合が約6割と半数を超えるのに対し、女性は3～4割にとどまり、融合形で一貫している人の割合は男性の方がかなり多いことが分かる。では、女性は連母音で一貫する割合が男性よりもかなり多いかというところでもない。男性と比べ女性でかなり多いのはアカイ/ナゲーである。つまり、男性は「赤い」も「長い」も融合形とする人が大きな割合を占めるのに対し、女性は「長い」については男性と同様に融合形とするが、「赤い」は融合形と連母音に分かれるという形での男女差が見られる。

さらに年齢層別に見ると、若年層になるに従い融合形で一貫する割合が増加し、逆に連母音で一貫する割合が減少する傾向が見られる。特に高年層である60・70代と若年層である20・30代との違いが顕著である。これは、形容詞において融合形がより一般化する変化傾向が年齢差として表れている面が少なくないと考えられる。中年層である40・50代は、その上下の年齢層と比べると、アカイ/ナゲーを中心とする一貫しない割合が増加する点が注目される。すなわち、融合形への変化はいずれの語にも一様に進むのではなく、基本的に「アカイ/ナガイ」→「アカイ/ナゲー」→「アケー/ナゲー」という形で、つまりまずナゲーが先行して一般化し、それを追う形でアケーが一般化するという順序があることがこの図から読み取れる。図5で見られたアケーとナゲーの融合率率の違いは、融合形が普及し始めた順序の違いが反映されている面が少なくないと考えられる。

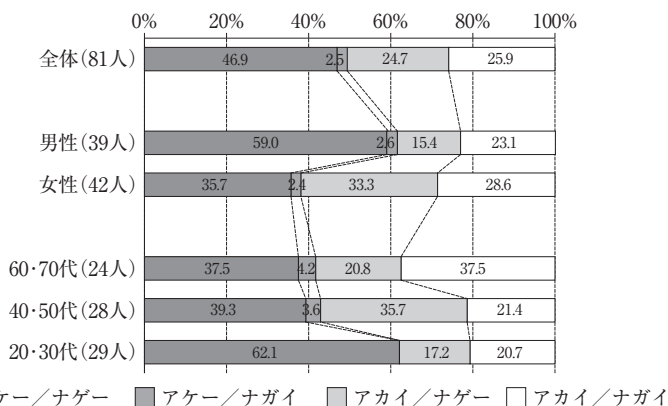


図9 「赤い」と「長い」の融合者率の関係

次に、「赤い」をアケーと発音した人（左側の2つの凡例）が、「長い」をどう発音したかという観点からグラフを見てみよう。まずは全体的な傾向を見ると、「長い」をナガイと発音した人の割合は極めて小さく、ほとんどの人はナゲールと発音していることが分かる。男女別に分析した場合も、数値自体は男女で異なるものの、「長い」はナゲールに著しく偏っている点は同じである。年齢層別に見た場合もこれと同様の傾向が認められる。以上をまとめると、「赤い」をアケーと発音した人のうちのほとんどは、「長い」もナゲールと発音していること、すなわち同じ形容詞の中でも「赤い」を融合形で発音することは「長い」も融合形で発音することを著しく規定するという傾向が認められる。特に20・30代においては、この調査で見える限り、そのことを完全に規定しており「含意尺度」となっている。つまり、「赤い」を融合形で発音するのであれば、「長い」もほぼ当然融合形で発音する、ということになる。

一方、「長い」をナゲールと発音した人（左から1つめと3つめの凡例）が、「赤い」をどう発音したかを見てみよう。まず全体的な傾向を見ると、アカイ/ナゲールよりもアケー/ナゲールへの偏りが認められる。男女別に見ると、アケー/ナゲールへの偏りは男性においてより顕著である。年齢層別に見ると、20・30代の若年層で同様の傾向が認められる。以上をまとめると、「長い」をナゲールと発音した人は、「赤い」もアケーと発音する傾向が特に男性や20・30代を中心にある程度認められ、先に見たこの逆の関係ほど強い傾向ではないものの、「長い」を融合形で発音することは「赤い」も融合形で発音することをある程度規定するという傾向が認められる。

逆の方向からさらに分析してみよう。「赤い」をアカイと発音した人（右側の2つの凡例）が、「長い」をどう発音したかという観点からグラフを見てみる。まずは全体的な傾向を見ると、いずれかへの偏りは特に認められない。これを男女別に分析した場合も、男性は「長い」をナゲールよりもナガイに、女性は「長い」をナガイよりもナゲールに発音する傾向が多少見られるものの、その違いは顕著というほどではない。

年齢層別に見た場合も、明確かつ一貫した傾向は認めがたい。以上をまとめると、「赤い」をアカイと発音した人は、「長い」はナゲーもあればナガイもあり、「赤い」を連母音で発音することが「長い」の語形を規定するというようなことは特にないと言える。

最後に、「長い」をナガイと発音した人（左から2つめと一番右側の凡例）が、「赤い」をどう発音したかを見てみよう。まず全体的な傾向を見ると、「赤い」をアケーと発音した人の割合は極めて低く、ほとんどの人はアカイと発音していることが分かる。男女別に分析した場合も、また年齢層別に見た場合もこれと同様の傾向が認められる。以上をまとめると、「長い」をナガイと発音した人のうちのほとんどは、「赤い」もアカイと発音していること、すなわち同じ形容詞の中でも「長い」を連母音で発音することは「赤い」も連母音で発音することを著しく規定するという傾向が認められる。特に20・30代においては、この調査で見える限り、そのことを完全に規定しており「含意尺度」となっている。つまり、「長い」を連母音で発音するのであれば、「赤い」もほぼ当然連母音で発音する、ということになる。先ほどの分析と合わせて考えると、「赤い」を融合形で発音するのであれば「長い」もほぼ当然融合形で発音するし、逆に「長い」を連母音で発音するのであれば「赤い」もほぼ当然連母音で発音するということになる。

形容詞の「赤い」と「長い」の関係について要点をまとめると次のようになる。

「赤い」を融合形（アケー）で発音する人は、「長い」も融合形（ナゲー）で発音する傾向が著しく認められる。また、「長い」を融合形（ナゲー）で発音する人は、「赤い」も融合形（アケー）で発音する傾向が、男性や20・30代を中心にある程度認められる。一方、「赤い」を連母音（アカイ）で発音する人は、「長い」はナゲーもあればナガイもあり、「赤い」を連母音で発音することが「長い」の発音を規定するということは特にない。さらに、「長い」を連母音（ナガイ）で発音する人は、「赤い」も連母音（アカイ）で発音するという傾向が著しく認められる。

すなわち、「赤い」においても「長い」においても全体として優勢である融合形は、両者を組み合わせて分析したところ、個人レベルにおいても優勢であることが確認されるのだが、融合形がより優勢である「長い」を融合形で発音することが「赤い」を融合形で発音することの基盤・前提となっている一方で、それが相対的に劣勢である「赤い」を連母音で発音することが「長い」を連母音で発音することの基盤・前提となっている、と言える。

4. まとめ

本調査で得られたおもな知見をまとめると次のようになる。

前稿で見られた結果と同様に、融合者率は品詞によりかなり異なることが確認された。名詞や動詞は融合者率が低い一方で、形容詞や形容詞型助動詞はそれが高いことなどが確認された。序列関係はおおよそ次のようである。

名詞 ≤ 動詞 < 「名詞+助詞」 ≤ 副詞 < 形容詞型助動詞 ≤ 形容詞

男女別に分析したところ、全ての調査語において、融合者率は女性よりも男性の方

が高いことが確認された。男女差の度合については、融合者率が全体的に高い語は男女差が顕著でないのに対し、それが低い語は男女差が顕著であるという違いが観察された。全体として融合者率が低い語で融合形を用いるのは主として男性である。

年齢層別に分析したところ、形容詞と形容詞型助動詞では、若年層ほど融合者率が高くなる傾向がほぼ一貫して認められた。これらの品詞においては、連母音の融合が現在一層普及しつつあることが年齢差として現われている可能性が考えられる。これに対し、融合者率が全体として低いそれら以外の品詞では、顕著で一貫した年齢差は認められなかった。高年齢層でもじつは衰退があり年齢を問わず一様に衰退している可能性や、若年層で先行して衰退した後高年齢層でも衰退が生じて数値が若年層に近づいた可能性などが考えられる。

「大根」(名詞)と「帰る」(動詞)を関連付けて分析したところ、次のことが分かった。名詞も動詞も融合形を使うという人は、現在ではかなり少数派となっている。男女別に見ると、女性は連母音で一貫している人の割合が非常に多い。これに対し男性は、いずれかを融合形とする一貫しない人も少なくない。

別の観点からの分析によると、連母音により優勢である名詞を連母音で発音することの方が、動詞を連母音で発音することよりも、個人レベルにおいて連母音を使うことのより強い基盤・前提となっていると考えられる。

同様に、形容詞の「赤い」と「長い」を関連付けて分析したところ、次のことが分かった。「赤い」も「長い」も一貫して融合形を使う人は約5割と多い。男女別に見ると、男性は「赤い」も「長い」も融合形とする人が大きな割合を占めるのに対し、女性は「長い」については融合形とするが「赤い」は融合形と連母音に分かれるという形での男女差が見られる。また、年齢層別に見ると、若年層になるに従い融合形で一貫する割合が増加し、逆に連母音で一貫する割合が減少する傾向が見られる。これは、形容詞において融合形がより一般化する変化傾向が年齢差として表れている面が少なくないと考えられる。その進行の仕方は、年齢層別の分析から推測すると、まずナゲーが先行して一般化し、それを追う形でアケーが一般化するという順序があるものと考えられる。

別の観点からの分析によると、融合形がより優勢である「長い」を融合形で発音することが「赤い」を融合形で発音することの基盤・前提となっている一方で、それが相対的に劣勢である「赤い」を連母音で発音することが「長い」を連母音で発音することの基盤・前提となっていると考えられる。

以上、今回の調査で得られたおもしろい知見をまとめた。岡山市民を対象に調査して得られたこの知見が、融合形を使う日本の他の地域においてもおおそ同様に認められるか否か、すなわちこれらの知見が現在の日本における一般的な傾向であると言えるか否かの確認的調査が、この先必要な作業の一つであろう。今後の課題としたい。

参考文献

青山融 (1998) 『岡山弁 JAGA!』 (アス)

上野善道編 (1989) 『日本方言音韻総覧』 (小学館、非売品)

- 尾崎喜光 (2013) 「岡山における連母音の融合状況—多人数調査から見る—」『清心語文』15
- 聶星超 (2006) 『「連母音の融合」と男女差の関係における調査研究—主に若者を中心に』(北京外国語大学修士論文)

付記

本稿の分析で用いたデータは、2013年度学内助成金(研究課題「岡山市における方言使用・方言意識の現状と動態に関する調査研究」)により得たものである。調査結果の一部は、2014年3月13日付の『山陽新聞』(夕刊)の「岡山弁の使用傾向は?」として、また2014年4月14日付の『読売新聞』の「手伝ってもらっていい?」という表現に関する記事として紹介されている。

(おざき よしみつ/本学教授)